



United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization



サクセス・ストーリー

日本：「世界を見る目が変わりました」

柳澤大樹



© Wake Shizutani High School

史跡、旧閑谷学校（国宝）を訪れる観光客は、通常の観光地にはない特別な経験ができる。旧閑谷学校の精神を継承する岡山県立和気閑谷高校の生徒が、ガイドとして案内役を務めてくれるのだ。

「地元の団体と協力し、ボランティアとして生徒が旧閑谷学校の案内をしているんです」。生徒会役員でボランティアの生徒をとりまとめている、和気閑谷高校3年生の森岡史佳さんは言う。

岡山県の備前市にある旧閑谷学校は、1670年に日本で初めて庶民にも学問の機会を開いた学校だ。その当時、教育を受けることができたのはわずかな特権階級に限られていた。そこで備前藩主の池田光政が、誰もが学ぶことができる教育機関として閑谷の地に閑谷学校を開設した。建学の精神となったのは孔子の教えであり、この伝統は今日に至るまで和気閑谷高校によって受け継がれている。今も校訓は儒教の精神に支えられているのだ。

2008年、和気閑谷高校はその伝統を課外授業に応用する試みを始めた。「わが校から10キロ離れた場所にある旧閑谷学校は、伝統的な建築の校舎と雰囲気観光客に人気です。わが校の歴史と、全校で学校の歴史を掘り下げて学んでいるという事実を踏まえ、生徒が観光客に対して旧閑谷学校を案内するツアーを実施しようということになりました」と、生徒会顧問の定金龍輔先生が説明してくれた。「わが校がユネスコスクール（ASPnet）として登録されたのは2011年ですが、伝統を重んじるという持続発展教育の基盤はそれ以前から存在していたのです」

当初は多くの生徒が「休日観光ガイド」の試みに対して抵抗を感じた。「私はひどく内向的だったので、全く知らない人を相手に話すのが苦手でした」と、2年生の万波生純さんは打ち明ける。「最初は学校を訪れた観光客に『無料でご案内しますが、いかがですか』と聞くのも苦痛でした。しかしある時から恥ずかしいという思いを乗り越え、積極的に話しかけてガイドを申し出ることができるようになりました。初めてガイドを務めたとき、その内容はかなりお粗末だったと思うのですが、観光客の方から『今日が初めてだなんて信じられないほどのガイドだった。ありがとう』と言ってもらえました。このように感謝されると励みに

なり、とにかく嬉しかったです。次第に恥ずかしいという気持ちも克服して、自信が持てるようになりました。ツアー・ガイドの経験を通じて、多種多様な背景を持つ人々と出会うことができましたし、自分の将来の進路や仕事について考える良い機会となっています」

3年生の福圓岬さんは、ボラティアについてこう語っている。「自分の通う学校と親しみのある町にこれだけの伝統があることをとても誇りに思っています。ツアーガイドをする機会がなければ、自分の学校が世界でこれほど重要な場であるということに気づく機会はありませんでした」

和気閑谷高校ではほかにもボランティアの活動が進められている。エコキャップ運動の一環として、ペットボトルのキャップを集めてリサイクルしている。途上国の子供たちのためのワクチン代を寄贈するため、生徒たちが回収箱を設置しているのだ。

定金先生は、この活動が和気閑谷高校を地域のほかの学校やコミュニティと結びつける役割を果たしていると考えます。「キャップが集まれば集まるほど、世界に貢献し関わることができます。活動を拡大するために、コミュニティ全体でキャップを回収できるようなコミュニティ規模のインフラが必要になるでしょう。生徒たちは、地元の人々と関わり合うことで、新たな視点や能力を獲得することができるようになります」

和気閑谷高校は、ユネスコスクールへの登録により世界と関わるようになった。2012年には、三菱東京UFJ銀行と日本ユネスコ協会連盟の後援による第2回ESD国際交流プログラムの参加者として、2年生のラメル・チェリアンさんが選ばれた。2012年3月、日本全国のユネスコスクールからチェリアンさんを含む10人の高校生がハイデルベルグ（ドイツ）にあるユネスコスクールとパリのユネスコ本部を訪れた。「発表しているときはものすごく緊張しましたが、最善を尽くしました」と、チェリアンさん。和気閑谷高校でのボランティア活動についてのプレゼンテーションは、ユネスコ・スタッフからも高い評価を得た。

「ほかの学校のESD活動について学ぶことができたのも、興味深かったです。ESDの活動で知られる学校、Internationale Gesamtschule Heidelbergも訪問でき、かけがえのない経験ができました。というのも、同校は環境面からESDにアプローチしており、私には新しい発見でした。こうした取り組みを学んできたのを踏まえて、帰国後はボランティア活動にも今まで以上に本気で取り組んでいこうと思っています」。ドイツのESDを間近に見て触発されただけでなく、パリのユネスコ職員と触れ合ったことも、チェリアンさんがESDにもっと力を入れようと思うきっかけになったようだ。

「私の将来の夢は看護婦になることですが、ユネスコ本部ではスタッフの一人から、『その夢を実現したければ、100%の力を注ぐべき』と言われました。今は、この一言を常にかみしめています。例えばこれまで、ボランティア活動や得意ではない授業にそれほど熱心ではありませんでした。しかし今回の研修を終えて、自分がすることすべてにこれまでより本気で取り組むようになりました」

和気閑谷高校はこれまでに、ソロプチミスト日本財団の社会ボランティア賞やプルデンシャル生命保険のボランティア・スピリット賞など、生徒の活動に対していくつかの賞を受賞している。「こうした賞をいただけること。それは間違いなく生徒の意欲を引き出します。わが校の活動が認められたことになるからです。ただし、私自身としては、生徒一人一人の活動によって、最終的には旧閑谷高校がユネスコ世界遺産として登録される---それが理想です。

そうならば、誰もが何世代にもわたって、学校のことを誇りに思えるでしょう」。定金先生の熱い思いが伝わってきた。

和気閑谷高校の積極的な取組みはこれからも続く。持続可能な社会の構築に向けた生徒たち一人一人の強い気持ちも、それを支え続けていこう。

詳細情報：

www.wakesizu.okayama-c.ed.jp

ユネスコは「国連持続可能な開発のための教育の10年（2005－2014年）」のリード・エージェンシー（主導機関）として、持続可能な未来を形作るために必要な知識、技能、生活態度、価値観を誰もが身につけることのできる教育を推進しています。

持続発展教育では、気候変動や災害リスク軽減、生物多様性、貧困削減、持続可能な消費など、持続可能な開発における主要な問題を授業や学習に取り込んでいます。また、学習者が持続可能な開発のため習慣を変え、行動を起こすことができるような参加型の授業・学習方法も求めています。

連絡先：

ESD(持続可能な開発のための教育)課

esddecade@unesco.org

www.unesco.org/education/desd

後援：

